

〔蓮歩色葉集多〕道路

〔書言字考節用集二〕道

乾坤

爾雅、一達

謂之道路、釋名道

路

說文、道路也、字

苑

阡陌總名也

獸

說文、同上

豪

釋名、城下

路

曰豪、同上

豪

〔道九〕

達之

龜背見活

謂法

經

廣韻連山

中絕也

〔日本釋名〕道

地上

云

みはあゆみ也、ちはつち也、人のあゆむ土也、

〔東雅〕道

地輿

ミチ

義不詳、上古には道をばチといひしなり、道早振といひ、伊都之道別なども云

ひし是なり、又ミチといひしは、ミとは御なり、チは卽道なり、古事記に御路の字を用ひてミチと
讀む、たゞへば嶺をミ子といひ、崎をミサキなどいふが如し、南北を阡とし、タテシノミチといひ、
東西を陌として、ヨコシノミチといひ、大路はヲホヂといひ、小路はコウヂといひ、又街衢等の字
讀てチマタといふは、道の分るゝ所なり、猶水のわかるゝ所をミナマタといひて、派また沱の字
を讀てミナマタといひ、派の字を用ひて讀む事、十字の如くなるは、我國の俗創造れる所
なり、徑路讀てタゞチといひ、間道讀てカクレミチといふなり、俗にスケミチといふは、タゞは直なり、今
レミチとは、あらはに人の通はぬをいひしなり。

〔倭訓栞〕

前編三十

みち

道路をいふ、神代紀に術方もよみ、皇代紀に學業もよめり、又充るの義、往

として有ざるかたなき意也といへり、爾雅に道直也、注に无所屈也と見ゆ、○中神代紀に御路も
訓せり、御は火々出見尊に就ていふにや、一説には眞路の義とす、又ちは本語、みちは御路よりい
ふともいへり、

〔古事記上〕

於是其弟泣居海邊之時

略中鹽椎神云

我爲汝命作善議、即造无間勝間之小船、載其船

以教曰、我押流其船者、差暫往、將有味御路

乃乘其道往者、如魚鱗所造之宮室、其綿津見神之宮者也、

〔古事記傳十七〕此に御路と書る、これ美知の本義なり、此處にのみ、此記にも書紀にも、道と書す

たる名なり、かくて此處は甚善道なる由をいふ處にて、美知はもと、道をほめて、御てふ言

にて重きが故に、本義を隨添